

<報道発表資料>

令和7年12月15日

京都市文化市民局元離宮二条城事務所

## 御殿の奥の花鳥 ～〈白書院〉四の間・帳台の間～

二条城障壁画 展示収蔵館 原画公開 令和7年度冬期 シリーズ転調の花鳥

この度、冬期原画公開「御殿の奥の花鳥 ～〈白書院〉四の間・帳台の間～」の開催について詳細が決まりました。今回は、花鳥図が描かれた〈白書院〉四の間・帳台の間の障壁画《雪中梅竹柳小禽図》と《秋草図》を公開します。



〈白書院〉四の間障壁画《雪中梅竹柳小禽図》西面（部分）

重要文化財（絵画）二条城二の丸御殿障壁画の大半は、徳川家三代将軍、家光（1604-51）の時代、寛永3年（1626）の大規模改修に伴い、狩野派の絵師たちによって描かれました。元離宮二条城では、「二条城障壁画 展示収蔵館」において、二の丸御殿障壁画（重要文化財）の原画を公開します。

今年度は、「シリーズ 転調の花鳥」として、二の丸御殿の各棟の北東にあたる部屋に描かれた障壁画に焦点を当てて紹介します。各棟の北東の部屋の障壁画は、他の部屋と共通しつつも、異なる特徴を持つ花鳥図が描かれています。

【事業概要】

- 会期 令和7年12月23日(火)～令和8年2月23日(月・祝)  
12月29日～31日は休館
- 入館時間 午前9時～午後4時30分(閉館は午後4時45分)※二条城の入城受付は、午後4時まで
- 場所 元離宮二条城内 二条城障壁画 展示収蔵館(〒604-8301 京都市中京区二条城町541番地)  
アクセス：地下鉄東西線「二条城前駅」又は JR 京都駅から市バス 9、50 号系統「二条城前」下車すぐ
- 入館料 100円(未就学児無料)※別途入城料が必要。※市内に在住・在学の小中学生、市内在住の70歳以上の方(敬老乗車証等で住所、年齢を確認できる方)、各種障害者手帳等をお持ちの方の入館料は、不要です。
- 公開作品 〈白書院〉四の間・帳台の間障壁画《雪中梅竹柳小禽図(せっちゅうばいちくりゅうしょうきんず)》、《秋草図(あきくさず)》(障壁画面数：31面)
- 主催 京都市文化市民局元離宮二条城事務所



〈白書院〉帳台の間障壁画《秋草図》東面(部分)

<解説と見所について>

二の丸御殿の奥に位置する〈白書院〉は、主人の御座所として使われた棟です。江戸時代までは「御座の間」と呼ばれていましたが、明治時代に「白書院」という名前が定着したようです。一の間(上段)のほか、二の間(下段)、三の間、四の間、帳台の間、そして部屋の周囲の入側と入側に接続する付属の間で構成されています。

〈白書院〉一の間から四の間の障壁画は水墨で描かれており、部屋ごとに画題が異なります。一の間と二の間は山水、三の間は山水人物、四の間と帳台の間は花鳥です。狩野永納(1631-97)が編纂した『本朝画史』によると、障壁画の画題には格付けがあり、山水、人物、花鳥の順に格式が高いとされています。〈白書院〉の各部屋の画題は、この格式に沿ったも

のになっています。一の間から四の間の水墨画の筆者は、狩野長信<sup>ながのぶ</sup>(1577 - 1654)とされます。

四の間の障壁画には、冬の景色が描かれています。雪に覆われ、白く霞む景色の中で、鳥たちが存在感を放ちます。雪山を背景に飛ぶ<sup>ひがら</sup>日雀、竹の上で寄り添う雀、水面をのぞく<sup>ぼん</sup>鵜、積雪の柳にとまる<sup>しまひよどり</sup>嶋鶉、水辺に群れる鷺。ここには、〈大広間〉に描かれた孔雀や錦鶏<sup>きんけいちょう</sup>鳥などの珍しい鳥、鷲や鷹といった勇壮な鳥でなく、雀や鵜といった素朴な鳥が描かれています。凜とした寒さの中で健気に生きる鳥たちの姿は、静かさと穏やかさを感じさせます。さらに、柴垣と竹の間から柳と梅が伸び、寒々しい冬の景色に植物の力強さが加えられています。

帳台の間の障壁画には、〈白書院〉の他の部屋が墨画淡彩で描かれているのに対し、濃彩や金箔が用いられ、秋の情景が表現されています。長押の上下で絵が分かれており、上には<sup>しおん</sup>紫苑と石竹の花が、下には紅白の萩や女郎花<sup>おみなえし</sup>、金箔押しの柴垣などが描かれます。下から湧き上がるように生い茂る萩は、余白を活かして描かれ、秋寂び<sup>あきさ</sup>の雰囲気を感じさせます。

四の間と帳台の間に、ひそかに宿る花鳥。その静かな命を知るのは、御殿の主人と身の回りの者だけ。穏やかな時が流れる空間が、二の丸御殿の最奥に息づいているのです。

<お問合せ先>

京都市文化市民局元離宮二条城事務所

電話：075－841－0096